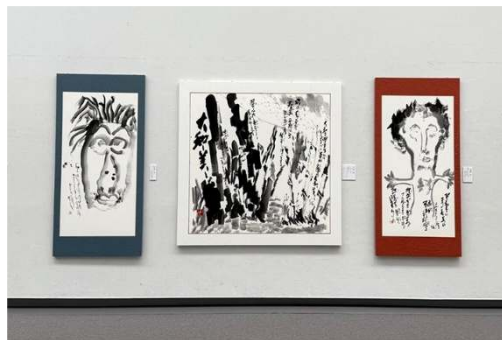




第61回 書玄展・第11回 公募書玄展
テーマ「棟方志功ー原始の力ー」

と き:令和7年4月15日(火)~20日(日)

ところ:愛知県芸術文化センター8階A室

本年のテーマである棟方志功は「世界の棟方」と呼ばれた青森県生まれの版画家です。陶芸家の河井寛次郎や浜田庄司、民芸運動の指導者・柳宗悦など、人生で出会った人々を師と仰ぎました。1942年、最初の随筆集『板散華』の刊行以降は、「版画」を「板画」と記すと宣言します。1948年に完成した『二菩薩釈迦十大弟子』等は、第三回サンパウロ・ビエンナーレにおいて版画部門の最高賞を受賞しました。

そのダイナミックな迫力ある作品群や、棟方志功の文章、彼を取り巻く人々の言葉から書玄会会員一七七名各々が感じた思いを表現しました。

更に今回は、愛知県芸術文化センター8階のメイン会場であるA室での展示であり、役員・会員一同、例年以上に気合いの入った展覧会となりました。

会長・加藤裕は、棟方が日本武尊（やまとたけるのみこと）の一代記を板画絵巻にした『大和し美し』から、文字と絵の融合が見事な三部作を披露。表現の幅の広さが圧巻です。後藤啓太は、河井寛次郎が棟方の大字書「華嚴」を賛美した「棟方頌」から最後の一文を。平野芳碩は、棟方が板画を愛する気持ちを書いたことば『ヨロコビノウタ』をリズムよく書き上げました。阿部秀峰は、棟方が

ゴッホのひまわりを見て感動し「わだばゴッホになる」と発した言葉を堂々と書きました。

波のウエーブのように展示した136点の小額作品も唯一無二の作品揃いでした。

遠方より、またご多用のなか御来場いただきました皆様に厚くお礼を申し上げます。